

「失敗しない総義歯作り」

須山 譲氏 先生

(深水皓三総義歯臨床実技コース講師)

ギージー(Alfred Gysi)の考えを引き継ぎ、更に改良を重ね発展させたゲルバー(Albert Gerber)の理論の基本的な話をさせていただきます。ゲルバーセオリーとは無歯顎補綴における理想的な咬合と義歯の安定を臨床と研究により追求することで確立された方法論と言えます。またそれを基に、深水皓三先生、堤嵩詞先生の治療義歯を用いて行う手法を取り入れた考えを実践した臨床ケースの報告を發表させていただきます。そして、先生方にも、ある歯科医と患者さんとのコミュニケーションの取り方に私が感動した1例を、ご紹介したいと思います。

「仮床形態について私が考えるポイント」

— 歯科技工士の立場から —

(株)フェリーチェ

生田 龍平 先生

(日技認定講師)

総義歯製作、それは上手くいったり、いかなかったりする。私たち歯科技工士が普通に製作した義歯でも患者さんが「何でも良く噛めます。」と言っていますと歯科医師の先生方から言われたりする。また気合いを入れて製作しても「痛くて噛めません。」と言われることがある。だから義歯って簡単でもあり、難しくもある。なぜそうなるのでしょうか？

まずはじめに、私たち歯科技工士が作業するのは咬合床です。手元に届いた模型がきちっと取れているのかいないのかの問題もあると思いますが、その模型に対して正しい外形線で仮床、もしくは義歯床が私たち歯科技工士が出来ているのか！非常に問題です。良い模型が手元にあり、良い仮床が出来て初めて良い義歯が出来るスタートと思っています。今回は解剖を考えながら外形線を検討したいと思います。

また臨床ケースを少しお話させていただき、皆様とディスカッション出来れば幸いです。

「総義歯製作から治療義歯によるオーダーメイド総義歯治療へ」

深水皓三 先生

(銀座 深水歯科)

無歯顎総義歯をどう作るかと聞かれたとき、先生はどう答えますか?ヒトの顎口腔状態は千差万別ですよ、患者さんが何を求めているのか。材料や方法、費用。そして完成するまでの時間や日数、そしてその義歯には、大きくもなく、小さくもなく、きつくもなく、ゆるくもなく、痛くもなく、落ちることもなく、見た目も良く、しっかり噛めて、入れていることを忘れる義歯を望まれます。

作り手の方はどうでしょう。術者と一緒に仕事をするスタッフ、技工士のスキル等、多くの要素が絡んできます。どうですか、先生は印象採得、咬合採得をどう行っていますか。

無歯顎総義歯は維持力と支持力を直接的に粘膜面と義歯床で得なければなりません。その難しさは品質工学の田口玄一氏の言葉を借りれば「動く軟らかい粘膜の上で安定して機能しなければならないわけで、とても高度な技術が必要」であると言っています。生理的に言うならば、咬合は神経筋機構と顎関節と咬合面との調和により得られるものであり、有歯顎時は、この咬合面をリジットな歯根と歯槽骨が支えていたが、無歯顎総義歯の咬合は、咬合面と動く軟らかい粘膜面が一体となってはじめて得られるという事になるのです。非生理的な顎口腔となった無歯顎では生理的な状態を得るためには、義歯を実際に使用してこれらの関係を改善しなければならない症例が多くあり、Dr Pound が用いた治療用義歯を基本として臨床に対応しています。

総義歯を簡単に作る方法はありませんが、アルジネート印象材による印象でも、ちょっと手間を加えるだけで患者満足度が上がります。また咬合採得をどうすれば良いの。というヒントには下顎位・咬合位の考え方、そして無歯顎規格模型、噛み合わせるための基礎床、咬合堤について話をしてみます。

そして患者さんが「有歯顎と同様な機能が発揮でき、かつ装着感が良い」を求めたら、術者は咀嚼時の咬合安定性を得て、客観的・主観的に満たすために「試作品」すなわち治療用義歯によるリハビリ・トレーニングを含めた総義歯治療が不可欠となります。作り手と使い手がともに「何ともない」という状況となってはじめて、印象も咬合も機能形態も満たすことができたと言えます。しかし術者は総義歯形態は作れるが、機能は患者固有のものであり、個人でしか回復・改善させることはできないので、両者で治療製作していく必要があります。